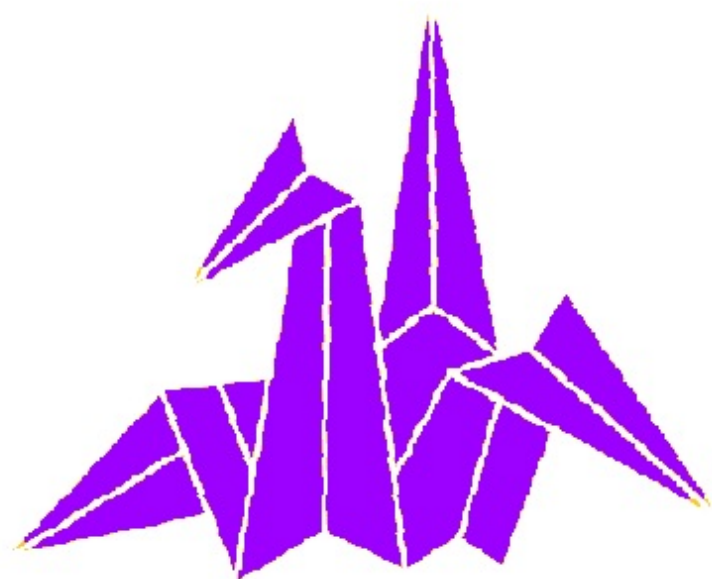


折

り

句



回

文

短

歌



この本で取り上げるのはは折り句と回文と狂歌ではなく「折り句もしている回文短歌」です。

回文の短歌といえば

「ながきよの とおのねぶりの みなめざめ なみのりふねの おとのよきかな」

という宝船の刷り物に付属する和歌が有名です。

その他にも現代まで伝わる歌が百首以上あり、最近の回文作家が製した歌もまた数百首、数千首とそれなりにあるようです。

しかしながら、回文好きの間でも回文が短歌や狂歌として定型で仕立てられていることを高く評価する人は少なく、全くその点を評価しない人も多いのです。回文の巧者といえども狂歌でもある回文を数多くつくるのはなかなか骨の折れる作業であり、数多くつくっても労力に見合う評価を受けられる見込みが少ない現状では、それを大々的に創って発表しようという空気は見られません。また回文歌は形が限られるところから似たような表現が頻発し、新味有る短歌が少ないのかも知れません。

そこで、私は回文短歌に「折り句」というもう一つの技巧を加え、更なる可能性と独自性を目指そうと考えたのです。

折り句というのはアクロスティック、web上の散文では「縦読み」と呼ばれている言語遊戯の一種です。5文字の単語や文章を一文字ずつ五七五七七の各句の頭に置いて短歌を詠みます。

伊勢物語の八つ橋の傍らで在原業平が詠んだとされる「唐衣着つつなれにしつましあれば はるばるきぬる旅をしぞおもふ」というのが有名です。

折り句は単独ではさほど難しい技巧ではありませんが、回文短歌の中でそれをするとなるとかなりの制約となります。回文歌はそれだけでも相当な技巧ですから、そこに更なる制約を持ち込もうと考えた人は未だ多くないのではないかと、恐らく私が最初なのではないかと思うのです。

単純な折り句回文短歌の作り方

回文短歌、回文狂歌については他の本で説明したことがあるのですが、そこに折り句という要素が加わりますとその作り方が根本から変わってきます。

まず最初に折り句にする五文字を決めます。その五文字には基本的に促音「っ」拗音「ゃゅょ」撥音「ん」長音「ー」などが含まれてはいけません。それらの音は日本語の冒頭には来ないからです。

折り句回文短歌の場合、折り句とする語を「ABCDE」と置き換えると次の図のような文字の配置になります。

A □ ▲ □ □

B E □ □ □ △ □

C D □ ■ □

D C □ ▽ □ □ □

E B □ □ ▼ □ A

このうち▲と▼で示した場所それぞれ四文字はそれぞれ文字の並びが逆となり、△と▽で示したそれぞれ五文字も同様に対となっています。また■は回文短歌の要でその両隣は同じ文字、つまりこの部分は3文字の回文構造となります。

特に、Cから始まる第三句、ここに使える良い五文字があるかどうかが見極めのポイントになります。さらにBE、DC、EBなどの字面が日本語的でないようなもの、例えば「るた」とか「ろみ」などその二文字から始まる文章が思い付かないような時にも諦めてください。

その後、文字数の少ない第一句と第五句の対を、さらに第二句第四句を考えるのが定石となります。

このようにして、織り込む五文字のチョイスを三十回も繰り返せば一つくらいは短歌にするのに適当な単語が見つかるでしょう。

「あいうえお」

愛たりと 言おうとしはる 上の者
得うるは死闘 老いとリタイア

「あいうえお」

あいたりと
いおうとしはる
うえのもの
えうるはしとう
おいとりたいあ

上に立つ、普段から威張っている人間が「愛をもって仕事をしなさい」とか言い出すのはうさんくさいですね。

どんな組織でも生き残るのは死闘なのです。何しろ人はすぐに老いてリタイアの時期を迎えるのですから。

耐うる末 宴か作を 得うる夜

飢えを草陰 田植えする歌

「田植え歌

」

たうるすえ

うたげかさくを

えうるよる

うえをくさかげ

たうえするうた

五文字の回文を冒頭に置ってみました。

午後の理事 苦心責めるか 呟きや

ぶつかる目線 しくじりの五語

ごごのりじ

くしんせめるか

つぶやきや

ぶつかるめせん

しくじりのごご

「あいしてる」

合う同じ いるアントニオ 師弟愛

手塩に頓阿 類似な欧亜

「愛してる」

あうおなじ
いる あんとにお
していあい
てしおにとんあ
るいじなおうあ

頓阿は有名な歌僧。西洋のアントニオさんと弟子の育て方について共通する何かがあったの
でしょう。

さて、実は頓阿さんは回文歌もつくっています。

疾く立たじ里の篁(たかむら)雪白し

消ゆらむ方(かた)の閉ざしたたくと

しかも「土佐行きと殿知らじ」或いは「土佐雪と焦らしの戸」というダブルアクロスティック
になっている？ これは、偶然でしょうか。

粹艶ぬ 云うに良き付け 芙蓉堂

夜更け月夜に 憂いぬ出会います

すいあでぬ

いうによきつけ

ふようどう

よふけつきよに

ういぬであいます

酔芙蓉というのは白花で咲きだんだん紅色に変わってくる芙蓉なのです。つまり、酔って顔が赤くなっていく様に擬えています。